

留学生の国際報道の受容と異文化適応 Foreign Students' Acceptance of International News and Cross-cultural Adaptation

黄 偉明¹, 中村 隆志²
Weiming Huang and Takashi Nakamura

¹新潟大学現代社会文化研究科 Modern Society and Culture of Niigata University

²新潟大学人文学部 Faculty of Humanities, Niigata University

要旨・・・留学生のメディア利用をテーマとして取り上げ、異文化適応の状況並びに国際問題への関心の高さとの相関の有無を検証した。2010年代の世界的なメディア環境の変化は、留学生の日常生活や社会生活にも及んでいる。新潟大学の留学生を対象にアンケートとインタビューを行った。アンケートでは、母国／ホスト国の友人への連絡頻度、母国／ホスト国のニュースのチェック頻度、異文化適応度を測る指標、国際的な紛争や国際問題に関するニュース・報道への関心の高さを測る指標について質問した。母国との連絡頻度の大小と異文化適応度の間には相関関係があり、また、母国／ホスト国のニュース配信元の選択と国際問題に対する関心の高さの間にも相関関係が確認された。また、留学生の国際的な紛争や国際問題に対する考え方を検討するために、ニュース配信元を選択する理由を中心にインタビューを行った。その結果、一部の留学生は、ニュース配信元を選ぶ際にも、遠い母国の保護者や友人を含みうる個人的な人間関係を基準にしていることが示された。

キーワード

留学生、国際報道、異文化適応、スマートフォン

1. はじめに

2010年代の留学生のメディア利用・ニュース受容・異文化適応の実態を明らかにするのが本研究の目的である。近年、留学生の送り出し・獲得が世界の大学間で競争状態にあり、これに政府の政策が後押しする状況が続いている。グローバル化が進展することは喜ばしいが、ただし、留学生の送り出し・獲得は単に数の増加だけではなく、留学生のホスト国での異文化適応度をも重視すべきであろう。人間関係を構築・維持し、情報の入手経路でもあるケータイ（スマートフォン）の利用の仕方は、留学生の異文化適応に大きく関与すると考えられるため、本稿ではケータイ（スマートフォン）とメディアの利用に焦点をあてて、留学生の異文化適応状況を明らかにしていきたい。

2010年代に入り、世界的にメディア環境が変化し、留学生の日常生活に直接影響するに及んでいる。留学生は、いつでも、無料で母国の保護者や友人に、繰り返し通話・連絡することが可能になっている。また、各国マスメディアがインターネット上で、ニュースを無料で配信するようになっているため、留学生達はいつでも母国から発信された母国語のニュースを視聴可能である。母国の文化が非常に身近になった現在、メディアの利用の仕方によって、留学生の文化的な生活が左右されており、それが、彼(女)らの異文化適応度や国際問題への関心の高さにも影響があると考えられる。2010年代の現在、留学生のメディア利用・ニュース受容・異文化適応の実態の解明が望まれていると考える。

2. 留学生対応とメディア論

世界的に、大学間での留学生の送り出し・獲得競争が過熱している。世界各国で留学生交流を促進するため、政府を含めた様々な機関が留学生の送り出し・獲得を推進している。国内においても、鈴木(2011)が述べているように、留学生の満足度を向上させ、日本社会のグローバル化を進めるため、大学内部だけではなく、各省庁そして地域や企業を含めた協力体制が構築されつつある。2008年に「留学生30万人計画」が策定され、その後、様々な施策が打ち出されている。国外の例で、例えばオーストラリアでは、1973年から大学が留学生へ向けた言語支援、カウンセリングサービス等の受け入れ体制を整備してきた。米国

政府では、様々な奨学金で留学交流を推進している。韓国では企業との連携による奨学金の支給と就職をセットした支援が推進されており、先進国を中心に世界的な留学生獲得競争は、大学間のみならず、政府間競争になっているとも言えるだろう。留学生が増加し、グローバルな人材が増加していくことは喜ばしいことであるが、実際には、数の競争が先行しており、増え続ける留学生のケアが後回しになっている感はぬぐえない。

留学生のホスト国との交流の推進を目指して、これまで多くの研究がなされてきた。国内では、異文化コミュニケーション学会や留学生交流学会、国際雑誌としては、International Journal of Intercultural RelationsやProcedia Aなどで活発な議論が加速度的に増加している。ただし、これらの研究の多くは、実地に留学生と「教室」で相対する教師側の視点からなされた教育的な研究がほとんどである。その一方で、メディア環境の変化は、留学生とホスト国学生との交流を促進しようとする、これら関係者達の取り組みの外側で進行していた。2010年代になって、その変化が留学生の日常的な人間関係や情報活動に直接に影響するまでに大きなものとなっている。例えば、Namkee, Hayeon, Kwan(2014)が論じているように、母国のSNSの利用が多い留学生は、日常生活の中でアカルチュレーション・ストレスを受けやすいことが示されている。2010年代の留学生の異文化への適応については、メディア論との関連が改めて指摘される必要があると考える。

3. 通信環境の変化

2000年代前半の携帯電話利用は、図1（左）に示しているように、通話は主に国内のみであった。また、携帯電話やメールの流行及び、若者によるメール文化は留学生の語学の壁とリテラシーの壁になった。その結果、留学生達にとって、携帯電話は異文化適応へのハードルになり、携帯電話を用いた他の学生との関わりが希薄になってしまっていた。金（2003）は、当時のメディア環境と留学生の異文化適応度との関係を考察して、ケータイを持っている方が適応度が低いということを論じた。一方、2000年代後半になったら、通信バケット定額制と高速通信が一般化し、また、Mixi, TwitterなどのSNSが流行した（図1の右）。この結果、ホスト国学生との交流が容易になり、ホスト国と留学生間の交流が促進された。叶（2014）が2011年に行った調査によれば、留学生の携帯電話使用が彼らの異文化適応状況にはプラスの影響を及ぼしたという指摘があるが、2011年頃は、本章後半に述べる4つの変化が大きく顕在化する前の時期であった。2015年現在では、母国との通信は格段に容易かつ安価になっており、母国との連絡を頻繁に行う留学生が少なからず存在すると見込まれる。無料通話ソフト・スマートフォンの普及により、母国の両親・友人とのつながりは強化されているのである。

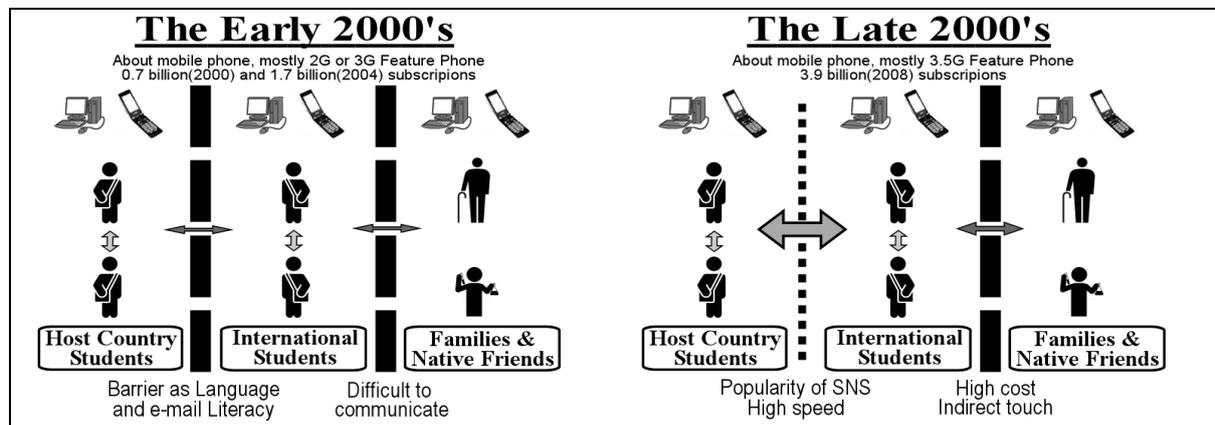


図1 2000年代における留学生をとりまくメディア環境

かつての留学生達は、母国から離れることにより、人間関係の多くがリセットされてしまうような環境におかれ、母国の文化に接する機会が著しく減少することを余儀なくされるのが当たり前であった。また、そのような母国の人間関係や文化から閉ざされた環境に耐えることが、彼(女)らの国際人としての飛躍的成長を支えるものと期待されてきた。しかし、2010年代に入り、通信環境の世界的な変化により、留学生の母国との人間関係や文化との接触の機会が格段に増加している（図2）。とりわけ、留学生の日常生活にまつわる通信環境の変化は、主に下記の4つの視点からまとめることができるだろう。

- ①クラウド化にともなう、メールとアドレス帳の保存と復元
- ②携帯電話端末の普及と無料通話ソフトの普及
- ③端末の多言語化
- ④ニュースの国際配信の増加

①と②により、留学に伴って、人間関係がリセットされてしまうことがない。ホスト国においても、留学生が母国で得た知人の連絡先とメール履歴はいつでも再現可能になっている。また、携帯電話の契約数が世界人口を超えるほど普及した現在では、留学生の多くの保護者や母国の友人が日常的に携帯電話を利用していることになり、彼(女)らに無料で直接連絡を取ることがいつでも可能になっている。これらのメディア環境の変化の恩恵を受けて、留学生達はホスト国での滞在期間中でも、母国の人々と、定期、不定期に交流を繰り返すことができる。

さらに、③により、ホスト国で端末を買って契約しても、留学生は母国語でその端末を利用することが可能になる。このため、研究上、あるいは就学上に必要な調べ物などを母国語のまま活用することができるため、言語のバリアがなくなるだけでなく、ホスト国言語の上達のモチベーション向上を妨げる可能性さえある。また、④により、ホスト国においても、留学生が母国からのニュースを毎日、無料で視聴することが可能である。彼(女)らは、母国で起こる様々な事象、事件、事故、社会問題、あるいはスポーツ試合の詳細な結果や名場面に、まるで母国にいるかのように接することができる。これらの通信環境の変化は、2010年代になって顕在化したと言ってもよいだろう。

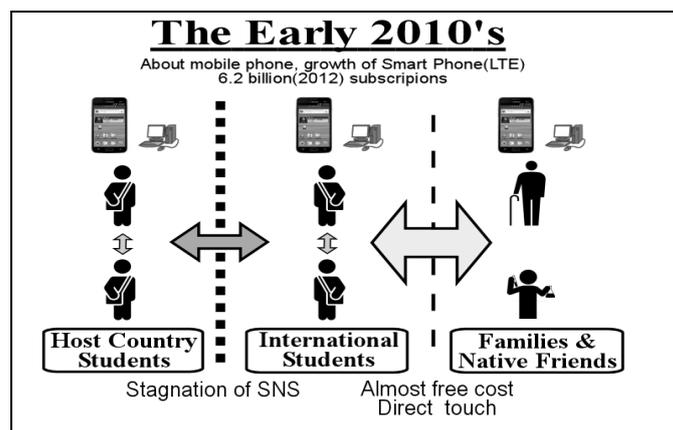


図2 2010年代前半における留学生をとりまくメディア環境

留学生は、当然のことながら、アカルチュレーション・ストレス、つまり、異文化との接触に伴うストレスに日常的にさらされており、時にそれからの逃避を求めて、母国の文化や人間関係との接触を好んで行いたくなるものである。かつて、母国の文化から閉ざされた留学生達は、このような逃避的行動が極めて困難で限られたものであった。しかし、2010年代では、いとも簡単に（自分のスマートフォンを数回タップするだけ）しかも無料で接触可能になっている。このような環境においては、一部の留学生達が、母国の文化に対して、過度に接触を求めてしまうことも十分に考えられる。

これらの通信環境の変化に基づき、本研究は以下の仮説を巡って検討する。

- 1-1 ケータイの世界的普及によって、留学生は積極的に無料通話ソフト・SNSを活用する
- 1-2 母国とのつながりが安定的に保たれるが、一方、一部留学生はホストとの交流モチベーションが低下になる。
- 1-3 通信環境が変わっている現在、母国とのつながりが可能になるが、異文化適応を遅らせる要因になる恐れがある。

研究仮説を踏まえて、Research Questionを以下のように考察する。

- RQ:1 一部の留学生は、連絡頻度が日本より母国の方が多い
- RQ:2 一部の留学生は、ニュース視聴が日本より母国の方が多い
- RQ:3 母国との連絡頻度が高ければ、異文化適応度が低い
- RQ:4 主に母国のニュースを視聴する留学生は、国際報道に無関心になりがちである

4. 調査の概要

新潟大学に在籍する留学生（本稿では中国人のみ）にアンケートを依頼し、質問調査の配布・回収を行った。被験者のルーティングは、スノーボール式であった。調査は2015年6月の中旬に行った。留学生60名を対象として、最終的に回収したのは56名であった。男女の割合は3対5であった。質問は日本語版を元に中国語翻訳版（リバースチェック済み）を用いた。質問は、大きく分けて、母国／ホスト国の友人への連絡頻度、母国／ホスト国のニュースのチェック頻度、異文化適応度を測る指標、国際的な紛争や国際問題に関するニュース・報道への関心の高さを測る指標について質問した。なお、本調査では先行例で述べられる異文化適応項目のうち問5、6、7で質問した項目のみ議論する。

5. 結果

(1)友人への連絡頻度

まず、母国／ホスト国の友人への連絡頻度について、以下のような2つの質問を行った。

問1 あなたは、母国の友達との連絡をどのぐらいの頻度で行っていますか？

問2 あなたは、日本の友達との連絡をどのぐらいの頻度で行っていますか？

2つの質問における選択肢は、以下である。

a.ほとんど毎日、b.週に2-4回、c.週に1回、d.月に1回、e.まったくしない

問1の答えと問2の答えを比較し、問1の頻度>問2の頻度となる被験者をグループA、問1の頻度<=問2の頻度となる被験者をグループBとすると、グループAは20人(36%)、グループBは36人(64%)となった。今回の調査では、母国の友人との連絡をホスト国のそれよりも頻繁に行っている被験者が、1/3以上の割合でいることが確認された。

(2)ニュースのチェック

同様に、母国／ホスト国から発信されるニュースのチェックについて、以下のような2つの質問を行った。

問3：母国のマスメディアから発信されるニュースを日常的にチェックしていますか？

問4：ホスト国のマスメディアから発信されるニュースを日常的にチェックしていますか？

2つの質問における選択肢は、以下である。

a.ほぼ毎日欠かさずチェックしている、b.2日に1回は、チェックしている、
c.週に1回か2回程度、チェックしている、
d.月に1回か2回程度、チェックしている、e.全くチェックしていない

問3の答えと問4の答えを比較し、問3の頻度>問4の頻度となる被験者をグループC、問3の頻度<=問4の頻度となる被験者をグループDとすると、グループCは24人(43%)、グループDは32人(57%)となった。今回の調査では、母国から配信されるのニュースをホスト国のそれよりも頻繁にチェックしている被験者が、4割以上の割合でいることが確認された。つまり、RQ1, RQ2が確認された。

(3)異文化適応状況

異文化適応状況を下記の項目を質問した。問題文の下には、選択肢を掲載している。いずれも、有意差が検出された設問について、述べている。

問5. 留学してから、日本語が上手になったと感じているか (5.7, 5.0, *)

1. 非常に感じている、2. かなり感じている、3. どちらかといえば感じている、4. どちらともいえない
5. どちらかといえば感じていない、6. ほとんど感じていない、7. まったく感じていない

問6. あなたはどれほど、一般的な日本人学生と一緒に勉強したり、仕事をしたりしたいと思うか (4.9, 4.4, *)

1. 非常にしたい、2. かなりしたい、3. どちらかといえばしたい、4. どちらともいえない
5. どちらかといえばしたくない、6. ほとんどしたくない、7. まったくしたくない

問7. チャンスがあれば、卒業した後、日本で就職したいと思うか (4.8, 3.8, **)

1. 非常にしたい, 2. かなりしたい, 3. どちらかといえばしたい, 4. どちらともいえない
5. どちらかといえばしたくない, 6. ほとんどしたくない, 7. まったくしたくない

各設問の後ろに括弧で付けた数値と記号は、それぞれ、Aグループの平均値、Bグループの平均値、それらの差の有意差を示している。***は5%水準、**は10%水準を表す。なお、平均値は、選択肢の番号をそのまま重み付けの素点として、算出した。

(4)国際報道の受容状況

留学生の国際報道への関心度について質問した。

問8. 国際的紛争、国同士の対立、国境を巡る争いに関心を持っていますか?(4.8, 3.5, ***)

1. 非常にある, 2. かなりある, 3. どちらかといえばある, 4. どちらともいえない,
5. どちらかといえない, 6. ほとんどない, 7. まったくない

各設問の後ろに括弧で付けた数値と記号は、それぞれ、グループCの平均値、グループDの平均値、それらの差の有意差を示している。***は1%水準を表す。なお、平均値は、選択肢の番号をそのまま重み付けの素点として、算出した。

上記の国際報道への受容状況に関する考察を通して、主に母国のニュースを視聴している留学生が、国際報道への関心度の平均得点が低いことが分かった。主に母国のニュースを視聴する留学生が、国際報道の受容が低いと予想される。

6. 考察

(1)メディア利用状況

アンケートの集計によれば、留学生は母国との繋がりが強化されていると考えられる。留学生は主に以下のようにメディアを利用している。①主に母国と連絡し、母国のニュースを視聴している被験者をグループACとする。②主に母国と連絡し、ホスト国のニュースを視聴している被験者をグループADとする。③主にホスト国と連絡して、母国のニュースを視聴する被験者をグループBCとする。④主にホスト国と連絡して、ホスト国のニュースをも視聴している被験者をグループBDとする。今回のアンケート調査では、グループACは12人 (21%) となる。グループADは15人 (27%) となる。グループBDは15人 (27%) となる。グループBCは14人 (25%) となる。人数の割合は、4つのグループではほぼ、同数に近い状態になっている。

(2)メディア利用と異文化適応度

今回の調査では、1/3以上の割合の被験者が、母国の友人との連絡をホスト国のそれよりも頻繁に行っている。また、4割以上の被験者が、母国から配信されるのニュースをホスト国のそれよりも頻繁にチェックしている。アンケートの集計の分析を元に、主に母国の人と連絡している留学生は、異文化適応度が相対的に低い。RQ3「母国との連絡頻度が高ければ、異文化適応度が低い」が確認された。一方、主に母国のニュースをチェックしている留学生も、異文化適応度が相対的に低い。仮説1-3のように、通信環境が変わっている現在、母国とのつながりやすくなったが、一方で、異文化適応を遅らせる要因になる恐れがあると思われる。

(3)国際報道への関心度

アンケートの調査を通して、グループCは関心度が相対的に低いということが分かった。RQ4「主に母国のニュースを視聴すれば、国際報道に無関心」が確認された。

留学生の国際的な紛争や国際問題に対する考え方をさらに検討するために、グループに分けて、13人の留学生を対象として、インタビューを行った。インタビューは主に母国／ホスト国のニュースを視聴する理由を中心に質問した。彼（女）らの答えた内容と、母国との連絡と母国のニュース視聴の傾向に沿って、表1のように分類した。

表1が示しているように、グループACが、母国とホスト国の両方の報道を信頼していないという考え方があり。しかし、母国の同士と共同話題を見つけるように、母国のニュースを主に視聴している。

グループADから、いろんな国の報道をチェックし、自分で判断する必要があるということが強調された。

また、グループBCが、家族と自分の将来のために、母国の報道に関心を持っている。一方、ホスト国での母国に関する報道が嫌だという考え方が分かった。

さらに、グループBDから、日本側がどのように母国を報道しているかを高い関心度を示している。「日本の報道のコメントは自分の考え方と近くて、受入れやすい」、「国際の変化は、自分の利益と関わる」という意見がある。

母国のニュースの視聴が多い人は、母国の人との個人的な関係を維持することがニュースソースの選択基準になっている。ニュースの配信元の選び方は、母国の人を交えた人間関係の持ち方に左右されると考えられる。

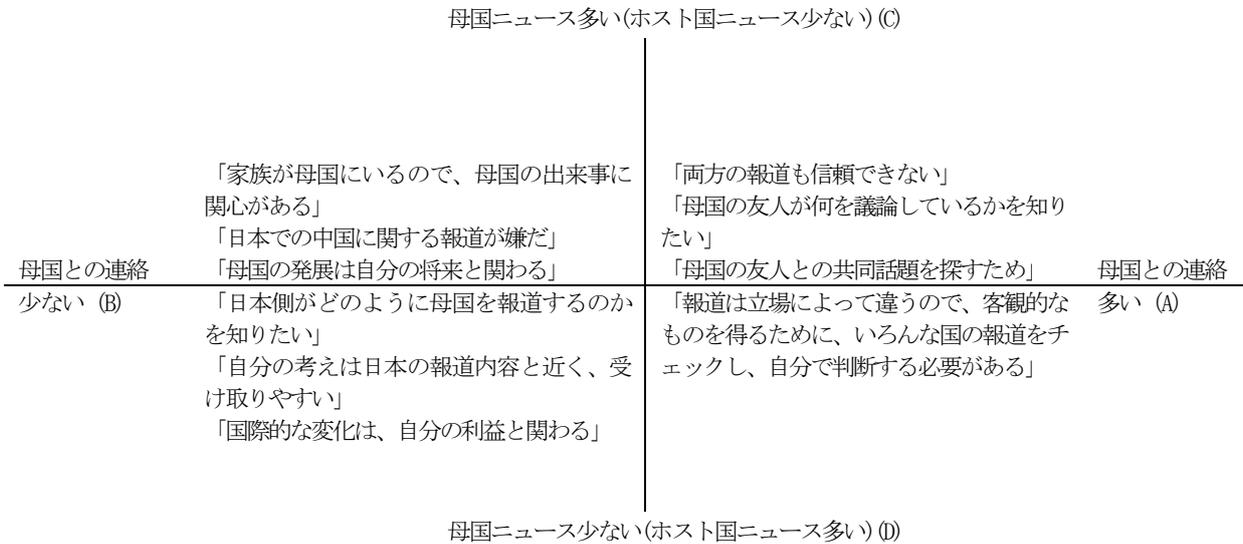


表1：国際問題を扱うニュースソース（母国／ホスト国）の選択理由

7. 終わりに

新潟大学の中国人留学生という限られた対象で、かつ少数のアンケートではあるが、母国とのつながりの強さと異文化適応の間に相関関係があることを指摘した。また、主に母国のニュースをチェックしている留学生は、国際問題への関心度が相対的に低いことを示した。このことは、留学生達のメディア利用が、異文化適応と国際問題への関心の両方と相関があることを示している。つまり、メディア利用の状況は、異文化適応や国際問題への関心度を反映するものと考えて良いと思われる。

一部の留学生に対してインタビューを行った。その結果を概観すると、ニュースソースの選択(母国／ホスト国)の仕方によって、その選択基準となる理由は異なることが示された。母国のニュースに偏りがちの留学生は「母国の友人との話題を探すために」、「母国の友人が何を議論しているかを知りたい」という基準で母国のニュースを選択することが分かった。ニュースソースの配信は、ナショナルな枠組みで行われているが、彼(女)らの選択は、母国の人とのパーソナルなつながりを重視して為されているのであり、ホスト国という「国」はもとより、その個別の人々に対する関心も小さいことが示される。一方で、両国の利害関係を俯瞰的に理解しようとする留学生も存在しており、彼(女)らは、母国のニュース以上に、ホスト国のニュースに強い関心を示していることが伺える。

本調査は、留学生のメディア利用・ニュース受容・異文化適応の実態を明らかにするための予備段階の準備と位置づけられる。本調査で得た留学生の意見を元に、さらなる大規模な調査を行い、考察を積み重ねていく計画である。

参考文献

- Namkee Park a, Hyeon Song b, Kwan Min Lee cd (2014) Social networking sites and other media use, acculturation stress, and psychological well-being among East Asian college students in the United States, *Computers in Human Behavior*, Volume 36, July 2014, Pages 138–146.
- 金相美 (2008) 「携帯電話利用とソーシャル・ネットワークとの関係—在留学生対象の調査結果を中心に—」, 『東京大学社会情報研究所紀要』 65, 363-394.
- 叶少瑜 (2012) 「留学生のコミュニケーションメディア観及びそれに影響を及ぼす諸要因」 『日本教育工学会論文誌』 36(1), 59-68.
- 叶少瑜 & 室田真男 (2014) 「留学生のコミュニケーションメディア使用が異文化適応状況に及ぼす影響—ケータイと PC をを中心に—」, 『社会情報学』 23, 1-15.
- 鈴木洋子 (2011) 『日本における外国人留学生と留学生教育』 春風社.